



特集 村松副学長へインタビュー

OPGE通信Vol. 5は、村松教育等担当理事・副学長に「男女共同参画活動について」お聞きしました。

男女共同参画活動に対する思い・期待について

本部(以下、本):お忙しいところ、本日はありがとうございます。早速ですが、村松先生が立ち上げにご尽力された本学の男女共同参画推進本部に対する思いや期待をお聞きしたいと思います。

村松理事・副学長(以下、村):まず、本部の前身である男女共同参画推進プロジェクトの立ち上げはある日の思いつきなどではなく、自分のテーマとしてきたジェンダー論研究などを通して長い思いが形になったものです。私自身、もともと社会全体として男女共同参画が進むことが、個人にとっても社会にとっても必要だし重要だと思っていました。その中で、この教員養成大学でそういうことに取り組みなくてよいのだろうかという思いはかなり前からもっていました。そこで、人文社会科学系長の任期中にプロジェクトの設立を提言しました。ちょうど社会も本学も、男女共同参画に対するある程度の共通理解が生まれていた時期でしたのでタイミングも良かったのでしょう。だからこそ、大学の予算でこういう形で活動できるのだと思います。プロジェクトは積極的に活動して白書をまとめることを契機に軌道に乗り、推進本部は私の予想や期待以上に活発な展開をされていますが、トイレの改修など地道な面でもしっかり活躍していると思います。今後の期待としては、もちろん今推進している一つ一つのことを、少しずつでも着実に実現していただきたいと思います。そして、教員養成大学の中にある推進本部ですから、教職員の中での男女共同参画の推進とともに大学教育を通してそうしたことに敏感な人材育成へつなげてほしいですね。メディア論も私の研究テーマですが、このOPGE通信も本学における男女共同参画のメディアとして、その推進や継続のために貢献していると思いますよ。それから現在検討中の保育所は実現してほしいですね。大学全体に目を配りつつ、できる形を探してあせらず進めてください。

ご自身の経験から思われること

本:本学に着任されたときの印象はいかがでした?

村:私は1991年に着任しましたが、社会学研究室では初の女性教員でしたし、大学全体としても今より女性教員が少なかったですね。ただ、それまでも男性中心の社会(本部注:NHK)にいましたし、自分がジェンダー論を研究していることもあり、こんなものだろうという印象でした。でも、それでよいとは思わなかったですし、「女性教員の会」というのを開いて交流を行い、さらにその中から有志の会を展開して情報交換したり旧姓使用の問題など様々なことを議論したりしてきました。この有志の会が今のキャンパスライフ委員会の前身になります。これらの実績や人脈も男女共同参画推進プロジェクトの提言につながっていったのでしょうか。

本:ご自身のご経験・ご経歴から社会全体の男女共同参画についてどのように思われますか。

村:私が大学を卒業し就職した頃の日本は、終身雇用制、年功序列型賃金が特徴とされていまし

たが、それは男性の話で、女性のことは無視されていたような社会でした。そんな中で男・女ということのない職業に就きたいと思いました(そんなことはありえないということは後に気づきましたが)。女性が仕事をしやすい職業という選択肢しかなかったので、研究の世界を選び、メディアに関心があったのでNHKの研究所に入りました。しかし、テレビが新聞や映画と比べて一段低く見られていた時代で、テレビは「女・子ども向け」とされていました。ですが、そのテレビを制作・研究する側が女性のことをわかっていないという思いから、テレビドラマの中の女性像という研究を始めました。これが1974年のことで、日本では初めての試みでした。女性学やジェンダーという言葉にもそれから出会いました。この研究も奥が深く、もう30年以上も続けています。(このような経験から)性による役割分担をなくして個人の能力を最大限に生かすような社会が個人の幸せにつながるし、それは単なる個人主義の話ではなく、ひいては社会全体、たとえば政治、経済、そしてメディアなどのあり方へも大きく貢献すると思っています。ジェンダーとしての男性の視点、女性の視点だけでなく、相互の視点を取り入れることで、社会全体が良い方向に動いていくと思います。その社会を担う人を育てていかなければいけません。



本：まさに女性進出の歴史とともに歩まれてきたご経歴ですね。では、どのようにしてそのような社会に変えていけばいいと思われませんか？

村：多様なやり方があっていいと思います。正面から中央突破していくやり方や、外部から徹底的に叩くという方策もありますし、内側から変えていく方法もあるでしょう。私自身は、男性中心の社会で生きてきて、その内側からどちらかと言えば穏やかに変えていくというタイプなんですよ。なにか気がついたことがあったら、問題提起や批判を少しずつついでいく形でしょうか。ただし、どのようなやり方をするにせよ、自分のやるべきことをやらなくてはなりません。文句だけ言ってもダメです。

本：ご経歴といえば、先生は女性で初めてエベレスト登山をされた田部井淳子さんと一緒に、中国の天山山脈の山に登られたのですよね？

村：田部井さんは、山の中でも性別役割分業があるということで、女性だけによる女子登攀クラブを作りました。私も女性ということにこだわっていたことから、出会いがありました。彼女とはその後も教育に関する活動でも連携したりしました。このように人のネットワークを拡げていくこと、人とのつながりは重要だと思います。その後も人脈を活かしてNGOなどでも活動してきました。これらのネットワークや実績も、本学での男女共同参画推進プロジェクトの立ち上げを支えてくれたと思います。

若い世代へのメッセージ

本：最近の学生は、女性の方が男性よりも元気が良いとも言われていますが？

村：小学校でもリーダーシップを取るのが女子ということがあるようですね。でも、最近の女子でも根本的なところでは男子を立てる面がデータにも見られます。日本のジェンダー平等度が低く、他の国に比べて変化が遅いのは、協調性や和を重んじる伝統による部分もあるでしょうね。ですから、まだまだ変えていく必要があると思います。本学では学生の男女の数はほぼ均等ですが、教職員はまだ男性が多数派ですね。ですから教員人事の面でも男女共同参画の精神を取り入れる一文が加えられた意味は大きいと思います。男性優勢の社会では、男女共同参画に関する事に言われて初めて気がついたということが多いのですが、これを少しずつ気づかせていくことが必要でしょう。私は役職柄様々な会議に出席しますが、女性は一人ということもよくあります。そんな中で、「会議の席に女性が一人くらいいないとおかしい」から「一人二人ではおかしい、恥ずかしい」となっていくべきだと考えています。そのような意識を養っていくためにも、私が様々な会議に出席していることが少しは役に立っていると良いと思います。

本：本学の学生など若い世代へのメッセージをお願いします。

村：大学生は、性差別を受けたという意識はあまりないと思います。学校教育のなかにもジェンダーを再生産している側面もあるのですが、気がつきにくい。が、社会に出れば、「女性」という枠にはめられたり、個人の行動が自分では気づかなくても「女性だから」という目で見られたりすることがあります。だから、一人一人が男女共同参画の意識を常に持って振る舞うことが大事です。社会は次第に男女平等になりつつはありますが、まだまだです。そんな社会に出ると壁にぶつかるかもしれません。でも、先輩たちはその壁を乗り越えてきたのです。何もせずにいるのは社会を変えないことに加担することです。これまでも、法律を例にあげれば雇用機会均等法や男女共同参画基本法なども、自然に社会が変わってきたのではなくて、女性たちが社会を変えてきたのです。これからも変えていけるということを忘れないでください。次の時代を男女共同参画社会にしていくことを受け継いでいってほしいと思います。



お知らせ

*学内のトイレ改修が進行中です

男女共同参画推進本部(OPGE)は、教職員・学生の職場・修学環境の改善を進めることの一環として、施設マネジメント部保全課と図って学内のトイレ改修・見直しに協力しています。

きっかけは、建物が全面改修され、ウォッシュレット付きの快適なトイレになったはずの総合教育科学系研究棟2号館および人文社会科学系研究棟4号館でした。安全性・衛生・スペースの面から、廊下と接するトイレ出入り口に扉がありませんでしたが、実際に使用してみると、多くの、特に女性教員・学生からの不満の声が聞こえるようになりました。OPGEが各講座と保全課を仲介する役割を担い、9月には扉が設置されて利用しやすくなりました。大学全体として研究棟のトイレ見直しの計画があることと呼応して、以来、学内トイレに関して男女共同参画の観点から保全課との協議を継続しています。

改修が既に完了しているのは、人文社会科学系研究棟2号館(時計台の下)の利用率が高い1階です。附属図書館は現在工事中であり12月末に完了予定です。

また、養護教育講座のある芸術・スポーツ科学系研究棟5号館では、学生・院生がほとんど女性であるにも関わらず、使用できる女性トイレが1個のみという状況が続いていました。現在、女性トイレ数の増加計画が進行しています。さらに総合教育科学系・人文社会科学系研究棟1号館(9階建て)についても、女子学生数が多いにも関わらず2階以上の各階は女性トイレ1個(男性トイレは4個)であることから、改修に伴う女性トイレ数の増加をお願いしています。改修中の自然科学系研究棟でも順次トイレ見直しが進んでいます。

なお、本学は地域に開かれたキャンパスとして、乳幼児を連れた親や保育者、高齢者、障害者の方も日常的な活動の場として多数訪れています。車椅子対応のトイレはかなり設置されていますが、乳児用補助椅子やおむつ替えシートを備えたトイレはまだありませんでした。そこで、総合グラウンド南側と時計台のある研究棟1階の障害者用トイレに乳児用補助椅子やおむつ替えシートを取り付け、「だれでもトイレ」として多目的化を図る改修が11月末に完了しました。

今後の改修工事はいずれも学期休み期間中となりますが、その他気が付いた点を男女共同参画推進本部や保全課へお寄せ下さい。

*男女共同参画フォーラム「みんなで子育て～男女共同参画を拓く子育て支援大集合」

日時：2007年12月26日(水) 14:00～16:00 場所：合同棟1階大講義室

本学で行われているさまざまな子育て支援の取り組みが、一堂に会します。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

*前号のお知らせについてのお詫び

2007年9月19日発行のOPGE通信Vol.4で、12月5日のフォーラムの会場がS410教室であるところを間違ってS411とお知らせしてしまいました。謹んでお詫びいたします。



コラム

男女とも楽にいきる社会

田 艶
(連合大学院教育学研究科博士課程修了・
現理科支援コーディネーター*)



日曜日の夕方、いつものように娘と一緒に「サザエさん」をみていたら、おもしろいことをやっていた。タラちゃんがお父さんやおじいさんのように毎日満員電車で通勤するのが大変なので、「男ママ」になりたいと言い出す。結局は主婦も大変であることに気づき、「男ママ」を諦めることになる。この物語には、もう一つ興味深いところがあった。近所に毎日子供を連れて買い物に行く男の人がいると聞かされたおばあさんは「奥さん、具合でも悪いのかしら」と言う。実は、その家の奥さんは大学病院のお医者さんで仕事が大変なのだ。

どうやらこれが世間一般の常識のようだ。子育てや家事は「ママ」がやることで、男の人がこのようなことをやるにはやむを得ない事情がある。この「事情」の中に「奥さんが仕事」というのは一番目に思いつく理由ではないようだ。

女性が様々な分野で活躍している昨今、「男女共同参画社会」の推進活動は必要に応じて誕生したはずだが、まだまだ広く理解されているわけではないようだ。

よく「女は楽だね」、「男は楽だよ」といった話を耳にする。大概、女が楽だと言うのは男性であり、男が楽だと言うのは女性である。そして、大概、楽だと言われている女性は専業主婦か仕事をしていても責任の薄いポジションにいるひとで、楽だと言われている男性は家事や子育てのすべてを奥さんに任せているひとなのだ。そもそも「女は家庭」、「男は仕事」といった社会的な構図が根源にあるからこそ、このような話がでるのではなかろうか。もしお互いが性別に関係なく、自分の才能が発揮できる仕事をしていれば、そして、平等に社会的な責任を担っていれば、性別による損得の話はでるはずがない。

「男女共同参画社会」とは、まさにそのような理想な社会のことである。その定義は、「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」のこと、となっている。堅苦しい言葉が連なっているが、要するに男女が性別を超越して平等に扱われる社会のことである。古き良き時代に求められた「女らしさ」、「男らしさ」とらわれることなく、男女とも自分らしく生きることでもある。

「男女共同参画社会」の実現は、「看護婦」を「看護師」に直すようなものだと私は思う。つまり、名詞を直すのは其程難しくはないが、人々が心の奥底から「看護師」と思うまでは長い年月が必要になるだろう。しかし「看護婦」を「看護師」になおしたのは大きな進歩だと思う。そして、男女共同参画社会はいずれ実現できると思う。なぜならば、それは、男性にとっても女性にとっても生きやすい社会だからである。

*文部科学省特別教育研究経費理科教育支援システム構築事業



〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学男女共同参画推進本部
●TEL/042-329-7108 ●fax/042-329-7114 ●E-mail/danjo@u-gakugei.ac.jp
●URL/http://www.u-gakugei.ac.jp/~danjo/
詳しい情報等はホームページをご覧ください。

